TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

2019年度　文化庁　大学における文化芸術推進事業

文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
大学から文化力 POWER OF CULTURE

～日本とアジアの音楽の出会い～

オコ！踊る!!

民族音楽フェスティバル～『伝統×伝統』

2020年 3月 20日 金・祝

13:00 開場　13:30 開演

東京音楽大学池袋キャンパスA館100周年記念ホール

主催：東京音楽大学
協力：Bunkamura
後援：豊島区、インドネシア大使館

ごあいさつ

本日はご来場、誠にありがとうございます。

平成から令和へと元号が変わった2019年度も残り僅かとなりましたが、東京音楽大学では、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を受けて、「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成」事業を、今年度から３年計画でスタートいたしました。これまで、日本とアジアの伝統音楽・芸能の講座、ワークショップとセミナー、研修等を９回にわたり開催してきました。本日は今年度のまとめとして、「日本とアジアの音楽の出会い」を皆様にも身近に楽しんで頂きたく、一般公開コンサートを企画いたしました。

プログラムの内容は、古くからその地域に伝わる「伝統的なもの」にこだわりを持ち、さらに、音や表現のルーツを探る「打つ、踊る」をテーマに、５地域の音楽・芸能・舞踊をご紹介いたします。

この多様性豊かな音楽フェスティバルは、出演者、教職員と学生、スタッフの４者が、様々な役割の中で互いの持ち味を意見交換・共有しながら、総勢１３０名で半年間にわたり準備し、つくりあげてまいりました。

また、この課題に取り組む中で、大学の語源でもある「コレギウム（カレッジ）＝研究する仲間達の集い」としての意識や友好もさらに深まりました。

アジア各地の楽器がたくさんステージに登場し、演奏されます。人と人のつながりを特に大切にし、代々受け継がれてきた伝統芸能の技と響演をお楽しみください。

最後になりますが開催にあたりまして、文化庁をはじめ、本日の記念すべきコンサートに携わってくださった皆様や関係官庁、ご来場の皆様へ心より御礼と感謝申し上げます。

文化庁2019年度大学における文化芸術推進事業
打つ！ 踊る!! ～日本とアジアの音楽の出会い～
民族音楽フェスティバル～『伝統×伝統』
プロデューサー 藤田 崇文（東京音楽大学学長特任補佐）

プログラム

ナビゲーター：福田裕美

第１部（ 対 談 ）13：30～

徳丸吉彦 × 渡辺裕

第２部（コンサート）14：00～

日本の伝統芸能
いわて大船渡行山流小通鹿踊り

かつぎ撥

朝鮮半島の音楽
金剛山歌劇団

1. サルプリ舞 [Salp'uri Ch'um]
2. アリラン [Arirang]
3. 農楽 [Pungmul]

中国の音楽
チェン ミン
共演：陳龍章（二胡）
陳松芳（越劇女優）
菅原裕紀（打楽器）
チェン ミン音楽園

1. 夜深沈 京劇「覇王別姫」より
2. 空山鳥語 二胡独奏
3. 三六 江南絲竹
4. 官人好比天上月 越劇「盘夫」より 他

第３部（コンサート）15：20～

インドネシア・バリ島の音楽　インドネシア・ジャワ島の音楽

1. プスポワルノ [Ktw. Puspawarna. sl.m]
2. バレガンジュール [Baleganjur]
3. トゥルントゥガン [Teruntungan]
4. ジュンタユ [Beksan Jentayu]
5. マカプン [Makepung]
6. ゴパラ [Gopala]
7. カロンセ [Beksan Karonsih]

インドネシア・バリ島の音楽 【2. 3. 5. 6.】
スカル サクラ（名古屋音楽大学 ガムランジェゴグ アンサンブル）
舞踊：イ・グデオカ・アルタ・ヌガラ

インドネシア・ジャワ島の音楽 【1. 4. 7.】
舞踊：ワシ・バントロ、リアント、川島未来
演奏：スリ・スパルセ、スヨト・マルトルジョ、ダルノ・カルタウィ
東京音楽大学 ジャワガムラン オーケストラ
木村佳代、樋口なみ、横田誠、小出稚子

※【2. 3. 5. 6.】や【1 4. 7.】は、演奏する曲目の番号を示したものです。

曲目解説

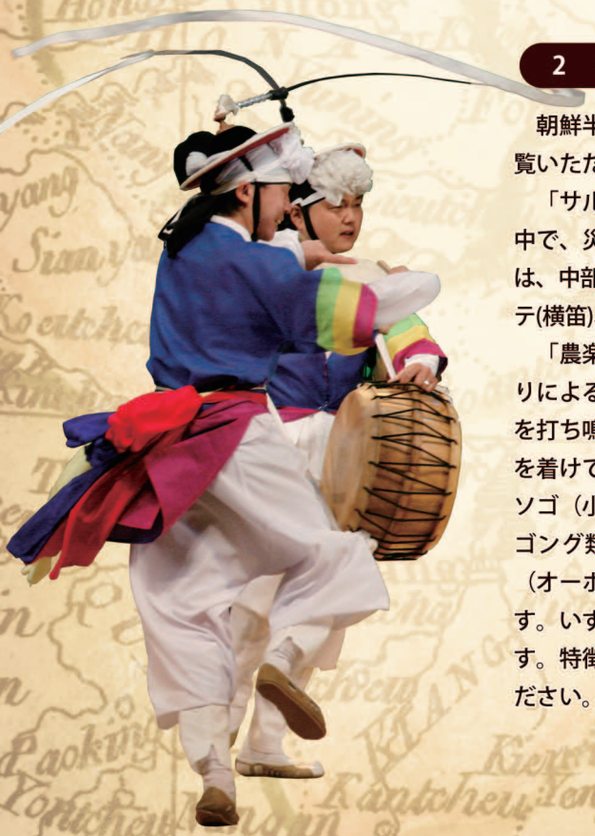
1　日本の伝統芸能

岩手県、宮城県、愛媛県宇和島市周辺に伝わる念仏供養や五穀豊穣を感謝する民俗芸能、鹿踊りをご覧いただきます。

本日の小通鹿踊りは「太鼓踊系」といわれ、腰に抱いた大きな太鼓を打ちながら歌い踊ります。踊り手８人が、特徴的な鹿角のついた頭と幕をかぶり“ヤナギ”を背負います。他の地域には、太鼓や笛などのお囃子が別につく「幕踊系」があり、踊り手が鹿頭から垂らした布製の幕を両手で持って踊ります。

踊りは真ん中の「ナカダチ」を中心に構成され、力強い太鼓の音や“ヤナギ”を”切る”（振り出してから戻し、すくい上げてしならせる）動作など、目からも耳からもその迫力を感じることができます。

今回の演目「かつぎ撥」は地元では「特別なときに演じるもの」に位置づけられ、他の鹿踊りの団体では伝承がなく、小通鹿踊りのみに伝承されてきた演目です。切れ目ない太鼓と踊りが特徴的で、次々と変化していく太鼓のリズムと踊りをお楽しみください。



2　朝鮮半島の芸能

朝鮮半島に古くから伝わる伝統舞踊、民謡、「農楽」をご覧いただきます。

「サルプリ舞」は、全羅道の儀式クッ(シャーマニズム)の中で、災いや厄払いのために踊ったものです。《アリラン》は、中部地方に伝わる有名な民謡です。カヤグム(箏)、チョッテ(横笛)、ソヘグム（弦楽器）の哀愁のある響きで演奏します。

「農楽」は単にプンムル（風物）とも呼ばれ、打楽器と踊りによるエネルギッシュな芸能です。豊年の喜びを祝い楽器を打ち鳴らし、雨乞いのためにサンモ（リボンの付いた帽子）を着けて踊ります。チャンゴ（砂時計型）、プク（二面）、ソゴ（小型）の太鼓類、チン（大型）、ケンガリ（小型）のゴング類の計５種類の楽器を使います。また、テピョンソ（オーボエ類）、ナバル（金管楽器）が加わることがあります。いずれも野外で演奏することが多くにぎやかな音がします。特徴的な足さばきやアクロバット的な動きもお楽しみください。

3　中国の音楽

中国を代表する弦楽器、二胡や京胡などの「胡琴」が活躍する伝統演劇、器楽合奏曲、独奏曲を聴いていただきます。

「胡琴」は２弦の擦弦楽器で、２本の弦を左手の指で押さえて音階をつくり、弦と弦の間に挟んだ弓毛で内弦外弦を摩擦することにより奏でていきます。

中国各地には300ほどの伝統演劇がありますが、その中から、北の代表として京劇「覇王別姫」で虞姫が剣舞を舞うシーンの《夜深沈》、南の代表として越劇「盘夫」の《官人好地天上月》を選びました。器楽・歌・舞が重なり合って生まれる表現の違いを感じとることができます。

「江南絲竹」は揚子江下流の地域、江南地方で生まれた小編成の管弦合奏で、《三六》はその８大名曲の１つです。

《空山鳥語》は劉天華が1918年頃に作曲した二胡の独奏曲で、鳥の鳴き声を模した旋律など、二胡の様々な演奏技巧を用いて、深山の情景を豊かに描き出します。

4　インドネシアの音楽　（ジャワ島のガムランとバリ島のジェゴグ）

優雅な青銅製ガムランの音楽や舞踊と、竹製楽器ジェゴグの迫力ある演奏をお聴きいただきます。

いずれも、東南アジアに広く見られる打奏楽器アンサンブルの仲間です。インドネシアのガムラン楽器は、竹、鉄、青銅などで作られます。ジャワ宮廷では、青銅製ガムランが舞踊とともに伝承されました。リズム周期を示すゴング類と、基本旋律を繰り返す鍵盤打奏楽器類、テンポを決める太鼓などで構成されます。音を聴き合い、楽譜なしに演奏します。

ジェゴグはジャワ島西部の村落で20世紀に盛んになったとされ、他のガムランとは異なり、4音の音階を基本とします。アンサンブルの名前は、長さが3mにも及び、一番低い音域を担当する巨大な竹製楽器「ジェゴグ」に由来します。現地では、複数楽団の熱狂的競演も新たに創作され、人気があります。

プロフィール

日本の芸能　太鼓を叩き、踊る「鹿踊り」は、嘉永から伝わる気仙地方160年の民俗芸能。“ヤナギ”をふる姿も圧巻。

いわて大船渡行山流小通鹿踊り

由来：気仙地方の鹿踊りは、大抵行山流を名乗っているが小通鹿踊りも行山流に属し貞享年間、入谷村(宮城県本吉郡)の善九郎という人が日頃市の金山で働き、その合間をみて小通部落の有志に伝授したのに始まるという。前田鹿踊りの師匠も同じ善九郎なので同系統のものであるが、その後善九郎が教授した鹿踊りは途絶えしかかった時期があり、その為に宮城の石巻から著名な師匠を招いて新たに教えを受けたこともある。嘉永5年(1852年)8月には同部落の松右衛門と言う人が東磐井郡大原山口集落（現岩手県一関市大東町大原山口）の喜平、喜三郎の両師匠を招いて教えを受け踊りの元が確立した。この鹿踊りは、初めは宮城県本吉郡の入谷派の流れであり後に東磐井郡大原山口派が取り入れたものである。

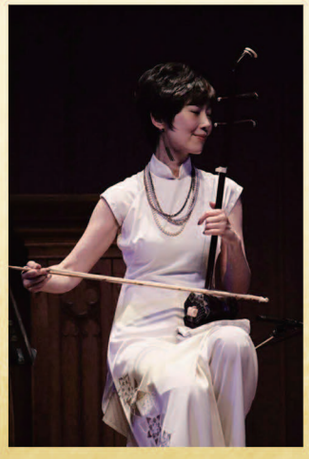
朝鮮半島の音楽　朝鮮半島に古くから伝わる伝統的な芸能。音楽とリズム、踊りはエネルギッシュ。

金剛山歌劇団

日本で生まれ育った在日コリアンたちによって結成された総合アーティスト集団で、朝鮮民主主義人民共和国の唯一の海外総合芸術団体である。18名の団員によって1955年6月6日結成された「在日朝鮮中央芸術団」が、1974年8月29日「金剛山歌劇団」に改名した。在日同胞並びに日本の皆様より多大なる支持声援を賜り、今日では団員約70名を擁する総合アーティスト集団に変貌を遂げた。「朝鮮音楽の夕べ」と題し、東京シティー・フィルハーモニック管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団との共演も開催している。

中国の音楽　中国の戯曲や二胡の代表的な伝統音楽を紹介。

チェンミン



中国・蘇州生まれ。上海戯曲学校卒業後、上海越劇院楽団の首席を務め、1991年来日。 1997年共立女子大学卒業。2001年にアルバム「I wish -我願-」で脚光を浴び、二胡ブームの火付け役になる。代表的な作品に、ＮＨＫ『スポーツ大陸』、大河ドラマ『風林火山』、『江～姫たちの戦国』、『いだてん～東京オリムピック噺(ばなし)～』、B's松本孝弘との共演『氷艶～月光かりの如く～』等のテーマ曲、劇中曲など多数。活動は幅広くジャンルを超えたトップアーティストとも数多く共演。2011年6月、チェンミンの二胡教室【音楽園（おとらくえん）】～夢を叶える場所～をスタート。2019年6月4日、二胡、ギター、チェロの弦楽器で構成されたアルバム『WEAVE～天籟の紬～』リリース！全国各地でリリース記念コンサートを開催、好評を得る。

インドネシア・バリ島の音楽　バリ島の竹製楽器のアンサンブル「ジェゴグ」は、荘厳なルックスと強烈なグルーヴが魅力的。

スカル サクラ（名古屋音楽大学 ガムランジェゴグ アンサンブル）

1980年、名古屋音楽大学現名誉教授、栗原幸江を中心に結成。名古屋音楽大学打楽コースの教員、学生、卒業生で、インドネシア・バリ島のガムラン・ジェゴグの演奏をベースに、西洋音楽、日本の伝統音楽の各方面の一流アーティストと共演している。海外ではインドネシア・バリ島に於けるアートフェスティバル、韓国の打楽器フェスティバル等にも出演。また1994年、しらかわホールのオープニングにおいて、ガムランに多大な影響を受けたスティーブ・ライヒに委嘱、「ナゴヤマリンバ」を栗原幸江・髙藤摩紀で世界初演。現在では世界のマリンバ奏者の重要なレパートリーになっている。浜松楽器博物館よりスカルサクラのCDが2019年にリリースされている。

また、このコンサートでは、スカルサクラと長年親交を深めてきた、ジェゴグの権威、スウェントラ（I Ketut Suwentra）の長男で、インドネシア国立芸術大学（ISI）に学び、現在カリフォルニアでガムラン音楽の普及につとめている、イ・グデオカ・アルタ・ヌガラ（I Gede Oka Artha Negara）を特別ゲストに迎え、共演する。

イ・グデオカ・アルタ・ヌガラ

インドネシア・ジャワ島の音楽　ジャワ島王宮の音楽。青銅製打楽器の豊かな響きが織りなす音の宇宙。

東京音楽大学ジャワガムラン・オーケストラ

本学「ガムラン」授業履修生、クラブ生、聴講生、卒業生、および講師陣からなるグループ。本学講師木村佳代、樋口なみの指導のもと、ジャワの古典曲や舞踊、新作に至るまで幅広いジャンルの作品に取り組む。2013年東京音楽大学校友会宮崎県支部主催の宮崎公演出演を機に命名された。2014年新潟国際大学における交流演奏会、2019年「インドネシア・ジャワのガムラン音楽」（ジュンク堂書店池袋店）、「SHIBUYAルネッサンス」（渋谷文化村通り）等に出演。「東洋の神秘のオーケストラ」とうたわれるガムランの古典的な魅力を押さえつつ新たな可能性を追求している。

プロフィール

ワシ・バントロ（舞踊家）Wasi Bantolo

中部ジャワ州スラカルタ市生まれ。現在、インドネシア国立芸術大学(ISI)スラカルタ校で舞踊理論、舞踊分析、古典ジャワ舞踊の講師、ならびに同大学の世界舞踊研究センター、国際センターの所長を務める。また、現代舞踊オペラ、現代仮面オペラの監督、振付家、作曲家として、欧米やアジア各国で公演にたずさわっている。これまでに、1993年の古典舞踊劇ワヤン・ウォン・フェスティバルでの主演男優賞の受賞をはじめ、数々の受賞歴がある。2003年〜2005年にはミシガン大学とウィスコンシン大学マディソン校にてジャワ舞踊の客員教授を務め、国際舞踊会議やフェスティバルにおいて講演、ワークショップ、公演を行っている。

スヨト・マルトルジョ（男性歌手）Suyoto Martorejo

ガムラン奏者の父親のもとに中部ジャワ州スラゲンに生まれる。高校生の時より父親と同じく太鼓奏者としてタユブ（舞踊の一種）のガムランで演奏をしていたが、その声の良さから多くの声楽コンクールで優勝した。1986年にインドネシア国立芸術大学(ISI)スラカルタ校を卒業し、2016年にガジャ・マダ大学で博士課程を修了した。また、カランガニャル県内のカラウィタンのグループのリーダー兼太鼓奏者、歌手としても演奏活動をしており、作曲家としても舞踊劇「Dewa Ruci」、「Gerakan Sayang Ibu」等の音楽を作曲している。また、欧米、アジア各国でも広く活躍している。

ダルノ・カルタウィ（太鼓奏者）Darno Kartawi

中部ジャワ州チラチャプに生まれる。2004年、インドネシア国立芸術大学(ISI)スラカルタ校にて音楽制作の修士号を取得後、インドネシア国立芸術大学スラカルタ校のガムランの講師として活躍している。ダルノ氏は、バニュマス地域由来のジャワ伝統音楽のチャルン奏者として知られており、バニュマスの伝統音楽に関する数々の公演、作曲にたずさわりゲスト講師も務めている。また、教員およびアーティストとして世界各国から多くの弟子がいる。

スリ・スパルセ （女性歌手）Sri Suparsih

中部ジャワ州ボヨラリ生まれ。現在、カラウィタン（ガムラン音楽）の分野で、または古典ジャワガムランのシンデン（歌手）としてインドネシア国立芸術大学(ISI)スラカルタ校の教育研究所に所属し活動している。これまでに日本、アメリカ、カナダ、ドイツ、デンマーク、イギリス等、数多くのジャワの芸術事業にたずさわっており、2018年にはスラカルタ校で実施した日本人対象の夏期研修でシンデンのワークショップのゲスト講師を務めた。

リアント （舞踊家） Rianto

中部ジャワ、バニュマス出身。インドネシア国立芸術大学(ISI)ソロ校卒業。2006年「デワンダル・ダンスカンパニー」を設立。これまで約25か国でジャワ伝統舞踊をベースにしたコンテンポラリーダンス公演、及びワークショップを行う。2016年イギリスのアクラム・カーンダンスカンパニーに起用され「Until the Lion」公演ツアーに参加。2018年ガリン・ヌグロホ監督がリアントの半生にインスピレーションを得て制作した映画「Memory of my Body」に語り部として出演。故郷バニュマスに伝わる伝統舞踊レンゲルを広めるため、2017年より「Kendarisada Art Festival」を開催し国内外のアーティストと文化交流に努める。

川島未来 （舞踊家）

共立女子大学文芸学部芸術学専攻劇芸術コース卒業。2001〜04年インドネシア国立芸術大学（ISI）ソロ校舞踊科、マンクヌガラン王宮にて舞踊の研鑽を積む。2006年リアントと共に「デワンダル・ダンスカンパニー」を設立。日本の郷土芸能八丈太鼓ジャワ公演やバニュマスの至宝スケンダル氏とダイサ女史を招聘した舞台のプロデュースを手がける他日本、インドネシア、シンガポール、マレーシア、オーストラリア、ハワイでジャワ舞踊を披露するなど活動中。2016年文京区にてデワンダルスタジオをオープンし指導にあたる。

対談：徳丸吉彦（聖徳大学教授）

音楽学を専攻。聖徳大学教授・お茶の水女子大学名誉教授。日本音楽を欧米とアジアに紹介し、また国立劇場・宮崎県立芸術劇場・紀尾井ホール他で日本とアジアの多様な音楽を紹介してきた。ヴェトナムについては、旧・宮廷音楽の再活性化に、また、少数民族の研究と映像記録にも努力してきた。また、国産の絹による箏弦の開発をしている。最近の著作；『ミュージックスとの付き合い方：民族音楽学の拡がり』（左右社、2016年）；『ものがたり日本音楽史』（岩波ジュニア新書、2019年）。

対談：渡辺裕（東京音楽大学教授）

1953年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学）博士課程単位取得退学。博士（文学）。大阪大学助教授、東京大学教授などを経て、現在、東京音楽大学教授、東京大学名誉教授。専門は聴覚文化論・音楽社会史。主な著書に『聴衆の誕生—ポストモダン時代の音楽文化』（1989）、『日本文化 モダン・ラプソディ』（2002）、『歌う国民—唱歌、校歌、うたごえ』（2010）、『サウンドとメディアの文化資源学—境界線上の音楽』（2014）、『感性文化論—〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』（2017）ほか。

ナビゲーター／事業企画・統括　福田裕美（東京音楽大学准教授）

東京藝術大学大学院音楽研究科応用音楽学専攻博士後期課程修了。「民俗芸能の保護をめぐる文化財政策の研究－地域社会における保護政策の運用を中心に－」で博士（学術）取得。東京藝術大学学術研究員、民間企業社員、中高音楽科教員、九州大学芸術工学府ホールマネジメントエンジニア育成ユニット学術研究員、京都造形芸術大学非常勤講師等を経て、現在、東京音楽大学音楽教育専攻准教授。自治体の民俗芸能調査にも関わる。

プロデューサー：藤田崇文（東京音楽大学学長特任補佐）

1800公演に出演し、350曲を超える作編曲は、モーツァルテウム管、プラハ響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、東響、神奈川フィル、札響、仙台フィル、名古屋フィル、大阪フィル等が演奏。テレビ・映画の音楽レコーディング、音楽番組、音楽祭のプロデュースや司会も多数担当。北海道とかち観光大使。2012年 和光市民文化センター館長に招聘され就任。2016年から東京音楽大学学長特任補佐を務めている。

東京音楽大学付属民族音楽研究所

日本の作曲家 伊福部 昭により1975年に開設。伊福部が生まれ故郷北海道でアイヌの音楽に多大な影響を受けたことから、アイヌ音楽の研究を主たる研究課題として出発。現在はさらに、インドネシアのガムラン音楽や沖縄の伝統音楽等、アジア地域における民族音楽へと研究範囲を広げています。40年以上の公演やワークショップ等の実績があり、また伝統の継承とあわせて新たな音楽表現の創造に力を入れてきた点が特徴です。

本事業では、民族音楽研究所が日本とアジアの伝統音楽・芸能のマネジメントに関する情報の蓄積と発信、情報と人材のクロスセクションの役割を担い、文化施設や演奏者・演奏団体、アートマネジメントに関わる者が情報を共有し利活用できるネットワークの構築を目指します。

打つ！ 踊る!! ～日本とアジアの音楽の出会い～ 民族音楽フェスティバル～『伝統×伝統』

コンサート出演者（演奏・舞踊）

日本の音楽 いわて大船渡行山流小通鹿踊り

会 長：三条勝芳　副会長：鈴木孝夫、新沼紀世志　庶務：菅崎等
委 員：近江廣範、近江敏明、近江正紀、笹野幸信、鈴木公喜、鈴木隆光
婦人部：新沼ゆき子、近江和江、鈴木明美
踊り手：三条健一（中立） / 新沼紀彦（左しがり） / 近江賢（左くちわ） / 近江彰（右くちわ）
三条和広（右しがり） / 鈴木将太（しがり） / 鈴木恵太（右中） / 笹野拓人（左中）

朝鮮半島の音楽 金剛山歌劇団

ハー•ヨンス（チャンゴ、ケンガリ、セナプ） / リュ•ジョンイル（サンモ、プク）
パク•カンブ（サンモ、チャンゴ） / チャン•ソングン（サンモ、チン） / キム•リリ（チョッテ）
キム•ソナ（カヤグム） / キム•ソナ（ソヘグム）

中国の音楽

チェン ミン　共演：陳龍章（二胡） / 陳松芳（越劇女優） / 菅原裕紀（打楽器） / チェン ミン音楽園

インドネシア・バリ島の音楽

演奏：スカル サクラ（名古屋音楽大学 ガムランジェゴグ アンサンブル） / 栗原幸江 / 髙藤摩紀
岸野麻子 / 長谷川裕祐 / 中村新 / 桃井千佳子 / 戸松法子 / 安達桂子、間野英里 / 内田一晟
高木桜子 / 桂山希実子 / 島岡里梨香 / 殖田真由 / 渡邊桃佳 / 亀山佳音 / 児玉佳佑
舞踊：イ・グデオカ・アルタ・ヌガラ

インドネシア・ジャワ島の音楽

舞踊: ワシ・バントロ、リアント、川島未耒
演奏: スリ・スパルセ、スヨト・マルトルジョ、ダルノ・カルタウィ

東京音楽大学 ジャワガムラン・オーケストラ

木村佳代 / 樋口なみ / 横田誠 / 小出稚子 / 池上牧甫 / エートゥ・ランタアホ / 加藤駿吾
栗原邦夫 / 志岐竜哉 / 島田裕里子 / 田口琴巳 / 田山里奈 / 中江彩芽 / 西山海音 / 福本カナコ
マトス・ファビオ / 山岡秀和
特別出演：折田美木（ランバンサリ）

対談

対談：徳丸吉彦（聖徳大学教授） / 渡辺裕（東京音楽大学教授）

コンサートスタッフ

プロデューサー：藤田崇文（東京音楽大学学長特任補佐）

舞台監督：友井玄男　コーディネーター：上野美菜（東京音楽大学打楽器３年生）
舞台回し：（東京音楽大学学生）津崎未佳 / 鹿野谷咲里 / 藁谷祐輔 / 渡邊優太 / 吉池穣 / 藤田菜月 / 石川真子 / 中村彩花
玉野井ゆき / 小林雄太 / 中村凜人 / 髙野真美 / 中町友洋 / 近藤菜月 / 由本悠朱季 / 岡橋優希 / 半田千尋
永森絢女 / 折本智英美 /

ナレーター：坂田優咲 （東京音楽大学ホルン３年生）
プログラム監修：小日向英俊（東京音楽大学客員教授）　プログラムデザイン：松下岳志
映像デザイン：中野宏紀（東京音楽大学映画放送2年生）　写真提供：岩手県大船渡市 / 中坪功雄 / 木村佳代 / 樋口なみ
受付：Bflat Music Produce　撮影：姫田蘭 / 小原信之 / 前澤秀登 / 松本和幸

ナビゲーター / 事業企画・統括：福田裕美（東京音楽大学准教授）
監修：加藤富美子（東京音楽大学付属民族音楽研究所所長）
東京音楽大学 文化庁補助事業推進室：赤木舞 / 伊志嶺絵里子 / 田中香織 / 佐々木可奈子
東京音楽大学 研究支援室：永井義美 / 瀧田忠彦 / 岡部有紗

主催：東京音楽大学
協力：Bunkamura
後援：豊島区、インドネシア大使館

東京音楽大学文化庁補助事業推進室
bunka.am@tokyo-ondai.ac.jp
https://www.tokyo-ondai.ac.jp/art_management/

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成

～「伝統×伝統」、「伝統×現代」、「伝統×地域」のクロスオーバーによる新たな価値の創出を目指して～

東京音楽大学では、文化庁「2019年度大学における文化芸術推進事業」に採択され、日本とアジアの伝統的な音楽・芸能の公演等について、「クロスオーバーによる活用」を主たるテーマに、以下の三つの視点をもって総合的に企画・運営できるアートマネジメントの専門的知見を有した人材を育成します。本事業は、東京音楽大学付属民族音楽研究所を推進母体とし、国内外の関連機関との連携をはかりながら、実施していきます。

2019年度は「伝統×伝統」（伝統の継承）として伝統的な音楽・芸能がもつそれ自体の魅力を尊重し、伝統的な楽器、演目や演奏形式、実演技法等を活かした公演やワークショップを展開します。

2020年度（予定）は「伝統×現代」（現代的な創造）として伝統的な音楽・芸能の魅力がより現代において輝くための新たな表現を追求し、伝統の枠に捉われない新たな公演形態や作品創作を開拓します。

2021年度（予定）は「伝統×地域」（地域への拡がり）として各地の地域レガシーを積極的に活用する視点と地域アイデンティティの共有を促すための方法論を各地で検討し実践します。

2019年度「伝統×伝統」プログラム

Ⅰ基礎講座

2019年8月24日（土）	伝統音楽・芸能講座
2019年8月25日（日）	アートマネジメント講座

Ⅱワークショップ実践セミナー

2019年10月5日（土）	第1回　伝統楽器・芸能体験
2019年11月9日（土）	第2回　ワークショップの事例と課題
2019年12月7日（土）	第3回　ワークショップの企画と立案

Ⅲ公演制作見学研修

2019年11月5日（火）	講座「『渋谷能』の制作」（セルリアンタワー能楽堂）
2019年12月6日（金）	見学研修「渋谷能『舞囃子五曲』公演」（同上）
2020年3月18日（水）	講座「海外における伝統音楽・芸能公演の実際」
2020年3月19日（木）	見学研修「『日本とアジアの音楽の出会い』リハーサル」
2020年3月20日（金・祝）	見学研修「『日本とアジアの音楽の出会い』公演」